俳諧七部通旨　一至三

別題

叙

人有謂曰鮮蛻囂埃之中。自致寰區之外
者。豈非必親魚集。樂林草隱居以求其
志哉。松尾宗房伊陽之士也。一日立功於
水利。飄然去君所。隱子東都深川之
巷。新卜居之時。栽一株之芭蕉。人呼曰芭
蕉翁。而其始見洛之季吟。又遊於林之門。
已覺其風野。其肯淺。語言大無味。為與

山口素堂。發一大見識。唱正風体俳諧。為一
道開祖。然而雅尚清遠。風流勝于世。終號
貞享武蔵門人等。樸冬日五歌仙。諸集隨而
出。是非必不事王侯。高尚其事。又非都乙鎮
躁。去危固安之譬也。而遯之時義亦大矣哉。
愚竊覩其諸集。冬日春日。則其歸隱也。猿蓑
炭俵。則其奠兎也。後人或存祖於冬日。殊不知
去彼奠兎。獨守其歸。吾倘所以有抱淺徒之
嘆也。夫翁之諸集。不為不少。而冬日春日。曙時
鮑。前後猿蓑炭俵。尤精粹。世唱之七部集。思自
蚤歲。得以讀。每患其易竟。而世之為注解者多。
文政之末。何允大鏡者出。大岳師傳抗衡。思以為
自苟非先人之說。拯之皆臆說也。竊綜輯旧
說。刪去穢雜者七部集評解。頗梏擊。以豪
其序有者。師豊曰。七部集蕉門之首領也。鋪錦
列繡。雕繢滿眼。未易曉暢。頗附會矯枉。不啻

南人嗜之。恐汝多言無得益後學者。於是愚秘其稿而不出。屢更裒葺。已閱之夏。門人求之切。不得已。遂按其稿本。取其十一。名之曰俳諧七部集。通有見編也。窺古先作者之心。略舉其所聞。間亦發己意。以具所未備。而其冬日春日也。如初發之英蕚。資其清以寫。即其潔以化。其至孫裴安依也。克鮮克輝。其語如水益清。以遠翁之本志矣。愚欲深探其究書其實戒。以示其光焉。乞學俳諧者。彼而此。以趨蕉門之堂。以入沁風之室。刻庶幾易為力云。嘉永二年己酉秋月。錦江揚正統貫卿甫撰。并書。

七部集通序

何ゝる年蓮池の講筵より七部集の評解なる草稿をそ
師翁の枕辺に置き老てあた七部集の口授を家元秘訣なるて
共往却もすゝ〳〵なる不自門に出書なる時ハ待小毛云の
傳のてゝ春の草木のもえ初るてきゝつゝも終に見なる絶句と
なる小ハ却て変化なる定むる小似さらんすてハ嗚呼の光陰の
なるを見なる涙に濡る小暇なん時ハ光なる侍むる小さんなきるとて
一拍もすゝ歌なきをむ小〳〵文庫小校定なるとをきれや
待歌連俳等造化自然の外小なら次祖翁四男小雪遊
去て正風体の俳諧なる唱小出をそ其姿ハ天地のてゝ其情ハ

造化に似て今日は昨日のてくり此日は今日のてくり船恒貴之の
句情に採り物に接して花實の曲節をあぢはひ古人の作
古今集とも云へる物語にも其句見へたり
きさらぎ冬の日の五句仙に春の日のうちたゝき次第に
見代りをかして暖昧に其風調に相かなひさかに世態
に題をとり作に意をあらはす人倫の不易の義理を
たゝくに風雅の法則なるべし其門下の
精撰にして温潤の氣象はあるいは見て七部集と称する
と見れば俳諧の林の我言葉にたゝ桃紅李白の情を

我れて夏炉冬扇の用に被ひ神祇らみ鬼に示す
鳥獸草木に心を寄て孝悌仁義の風流さきを彼の
索隱の注者に事は清稽の大意も明らかにあらはるゝ
爰に元禄七月日に風人其海延の折に彼の詳細の
稿本を得て本末の次第に倫んとて事の次第をあらはす
彼の一棒の路に八桂柳にさかれも其風雅に深切
なるを以て韜晦のいまだ発揮せざるに陶然に通暁せ
今茲稿本に相違して後に通有十巻に撰せ其の意之
素四の求に庶して其屋筆の労に不ん為ものを
さは言へ俳諧の変化は人へ八百句百変八句論るに時の

語脈我為に改めて通ずると共琴の柱に膠
せんかを補ふに自在の医者にはから次善に文教の元氣を
養ひ六通の耳目我開のんかに儒佛も固有八月にて苦
薩も吾我振ふべき欲さハ此まを名公の傳に倣ひて自己乃
待傳に誇らん為に小世高上代和に笑ふて我他彼自
振ふべきなり
嘉永二年己酉八月

かゝ一の　蓮池主人識

凡例

一　此書八弟の先に撰せる孔の七部集詳解の抜書にして
発句附合とも者て解一のまきもの沢ハ付て注釈我加
諸流多しといへとも世に用なるハ一つ二つにすぎ沢者て
門下の不審ある毎に我年沢
素堂主人の光発師に業の只授我ものとす世後の只徒と
いへとも是我ものとすべきて師流と極て唯世一とふ
ゆるなハ世後我ハけて示まを向解四流といへるハ雖流とも
定発のゝ一なきより他へ未だ我いふ世他ハ名我ゆら
さ一仕ハの注解ハ発の人のみ世者今人の流と以とも
有用なるべきなり

一 古書に引き古書に成あり仮名特撰に成候と出るも此長開の
作小後ひ陪て其本に成候ものなる小原沢いたんや原口清
其実地に小倉されて其所なる事多かるべ
一 七部集解七部解といふるハ松宮の秘本と寄の手記
其ほの一本にて其後の有用なとをて其書に志く
無世次誰の説なの書といてさるに皆弟の臆説あり
一 猶説多りといへども其所小至をてハ猶考水月言語
年譜書述ものー房之ものきり系の孫孫法まて北
捷小ならさるも此世るて小感所といへを此書意月
後て解せ得るものあるといふへのるに
蓮池五人七郎

七部集通旨目録

巻之一 冬之日
巻之二 春之日
巻之三 阿羅野
巻之四 阿羅野
巻之五 阿羅野

巻之六
阿羅野貞外
巻之七
飛佐古
巻之八
猿蓑
巻之九
猿蓑
巻之十
猿蓑
巻之十一
炭俵
巻之十二
炭俵
巻之十三
續猿蓑
巻之十四
續猿蓑

凡十四巻原十巻今二三子閲覧之退窟我者ハ
為耳別而為十四巻云

七部集通有巻之二

冬の日

紫八貞享元甲子年芭蕉の庵の撰ぶる所の句を集めて故小川延貞
天和の古風の称をりぬけさるを古今をかれ之改小李由許宗陀
法師小もの原ひさを称ふの後称ふと改て来る小似れとも
ひろ和の時代や世庚儀さる所の俗言を作り茶さるの
俳諸の古今集等と初心の人見より入門一変後後さるを其小茶さる
みの月りての上の集句りは境よりて見をけ山をいまを二世風雪も
冬の月小春の月小ちるを称ひろ和ひさを称ふの小機一さて変像
を作り上る後さるみの元山変儀作り且同集小能きを母句りいを
紫城冬の日と名づけるるハ小ふ小て称ひろ和も後て論をる刃
時代次冬の朝日の称ひろ和ひさを名づくるハ小四説句り既号のるハ

さて作者心地の発するまゝつゝ一句一字の内に一部の大意
はゝくまんといふ作者の心所といふべき句なり
まことの作者は世間の表もとのひゝ詞に
師匠の尺をもとゝなるべし五歌仙追加にて皆各の句表地
体にすりて異せるあるといへども四流に
きるべき歌仕の朝月の立花とにかゝわりて発句
古来より北流あり作者一人の集芭蕉翁を発句
西風俳ひらき江戸にて虚栗成蹠篇を他門に弘められ
蕉の日本橋の俳諸に次ぎ書は義自筆の板刻といふ
考に有

犯句木のもとにたゝふ仏弟子似るべく花　芭蕉

師匠に素堂馬光などの句に師匠といふ女房同心れ義成るべきなるあり　北句別に狂句と

題して風の分と詠じ一句を発句とて一句と所詠する女性きに成て
女房といふ者も定家に北流なるべ人の移を不分なるこの
ら北より北下家と詠むべし女一類なり竹斎は山崎の宗医の薬師
にて京にあらはれいる所等一人成見て諸国俳諧に出るの女後
屋に出る者にて三河の国天下一庸医竹斎と軒に記れ成者く
狂句なり庸静も春隣もなくぬ竹斎成らぬ病家は無なりと
いふ竹斎物語三巻なり待に狂詩なりこの狂詩なり俳諸に北句
なるべきなり一句の心詞狂さきて狂句とはなきるべ別なる俳
の分なるべきなれてとまら次といふ流儀と治定の決定とにきき
より先哲の論に定るなり北句の流儀抄に尺べきり表に略を
とゝやとゝなる　金の山茶花　野水
師流俳諸の表に自ずから成ばいなその人の発句なり　金ずきなる

花の一本此てさへよりて此趣ありされやといへのれきこゆる姿ありといへども
文来菴社中の覚書にしるするハ関寺之利気すると書くとぞハよみ
く世のいとふ一説疾気多犯気を云愚按るに枕草紙水の除ハ
ならぬのはらしと人の顔あむにつけてなりたりといへるハとにかのしと
いへり遊北諍切散気也ほとをしると刻せとをしるハほとをしる也
水の遊るつてく人の狂ひをしるなめらん強花に尽し

有明の三も水に酒名つくらせるし　荷兮

職原抄云主水正一人従六位上唐名上林云云　文来菴社中覚書に
主水ハ官名禁中水など用ゆる役之水手より酒など作るといへる也と
いへども按るに主水に酒ハなき也抄へえ此邦人待宵の侍従のとき
詠ひなきハ有明の主水ならずといふ俳諧なり　附心ハ前句を発犯人
と見てる其場の転化なるべし

このしら比　露紛やるに　何か　馬　重五

按るに酒屋に赤馬の疾気ハ廿八舎ノ展ハ按くの小胆扉ハきゝしといへる
天然の風姿ありて其場画に書けるごとし

朝鮮の不老をきくき此句を取れき　杜国

八雲御抄に日を出ぬると云ふハ日の山に映しるることといへるもおもしろきに
うたゝにかけもぬくさひき風姿あるべし

日のちりしくに　帰に糸などかかる　正平

師説に日のちりくハ日のまはりに入らんとする時其色の散乱する伐
いふよし見えたるも

我春ハ浅草に　有のまてにて何とも(?)にて　野水

「御定書百ヶ條」に
「（従前之例）
一離別状不取他え嫁候女ハ
髪を剃親元え相返す」

○髪をそりて　同じさかのほと　芭蕉

伊勢物語古注などに髪をそる業平吾妻に下りしとて物語の作也

都にて好色の俗語を恋ごろの風と名づけ、
はるばるきぬ東山に隠居せし戎東と作り、
栄枯盛衰小業平伊勢の神宮戎狂一又二条の后と妻通ひけるが
せうとの人ついきとなりて妻なきうて長谷の稲荷の方に下向せと
なるを妻を奪ひ同じ第四戎東山の麓花と云ふ高野に世人北
つけ物を一一一説小遣俗の后の伊勢といふみ通次後で男女
恨をうらみ次

○いにしへ北ばらと乳戎をなりて　二十五

三条人北つ者にて第四戎后と云ふ妻なる戎侯
人物はなを思ひ小乳戎をなりて心つのひ二四百年ばらの
なを一説人のさのちにて妻なきられるの人のそれら言のはらのと
云おきなきもまてひき離されさる女伊勢ものとことふ又通次

住めそしとそふすいくと　百号
みは人北つけ小て小児の死ると一解り
影法のねうきこそくロ戎さきて　芭蕉
世戎のつけ姿家の姿解り

田中伊勢こまんの　柳　為る　比　花号

夢左衛人七歩さの小伊勢山四の月を注例とい不小言とい
女ねう子小篠る嘉うき名を一説世戎ねう子戎投く世を七柳
小まん柳といふ変戎小伊の園田中小ねうと云ふ小一

とかりさのうき町小ひるを為る　二十五

列子流菩薩云人有桔梗樹春其鄭文言桔梗之樹不祥其
鄭人遂而伐之鄭人父因請以為薪其人乃不悅曰鄭人之
父欲為薪而教吾伐之也今我鄭君此其陰豈可哉陰さの

志きと訓出せるてき人情なるへし

二の尼小を清の花のさかりきく　野水

業菴社中覚書小樫稚小一の尼二の尼といへる名称をとゝ小西行橋
稚小を西行の弟子と伝ふるを事実の別家成横此不といふ
信号名称いふ小や弟子と称すと称せよ　此句さの巻の秀逸
なりといへり

怖ハむくらふとたすり　泉このむ　芭蕉

柳るる小樫小藤を待の比の体形一二の尼の遺ちふ下をし心なふ
甘人の附之諸流ゆらるれら沢

いまそうらとの矢数えふ川　声　若今
ぬさ人の祀会の松の　吹おまりく　芭蕉

東海道名所図会云青地の不友の万半町えの下小の青地の

一と木松とも云常盤松の名称稚を他る成世人然坂拍見松と云
古代の松ハ応徳年中大風小倒き今存せるハ柱徳の松なりとへ
云也　集貞享元年なり正徳ハ正保の誤小や柱号ぬ原
附ケ貫坂小て別小子細ハ〜沢

志をし　宗祇の名称つけ　多　杜国

宗祇ハ伯尾紀州の人自称外稚西菴と云文亀二年七月豆別
湯本小て卒去年年二歩初枕国の定林寺小葬る又相州湯本
早雲寺小墓碑ハ和歌の達人連歌の祖なり宗祇の水ハ美濃
郡上郡山田の居宮瀬川の辺を小ハり白雲水と云無坂の拍見松
宗祇の水樹情也猶小来逢るよ　夢者七部さこの小落の心
山小も宗祇の水ハと云号ぬ原

笠ぬきて　三理小もぬる　北村　雨　若今

其句のつけハ世にふるハ更に時雨の宿りかな此句より出たるにや

志ら〳〵と砕けしハ人の骨か　何　杜国

烏賊ハゑびすの国のうらかた　重五

按するに亀卜ハ上古より是を用ひきたれども其傳(ウシ)ひて他に
史記亀策傳にも詳ならず烏賊ハ夷狄の卜といへる亀卜に
對していへる滑稽なるべし　柏子のつけとも言ひて此三路
七部解ニ北毛の濱邊ニていふ烏賊の甲を海へなげ多くちりしかたへ
猟ニいづるをいふに是導きとやいへり　トのするハ海にて清版銀
仕ニゆきこゝみに数物洩し人の詞ども又ハ猟手の筆に掛け
つれて其柄のむくかたにゆきてうらかたなきくすと云ふ其外うて占
うみ笄算の類ひ文多しされハ烏賊のうらかたも実に
所といふへつべし

哀れさの　謎にもとけし　時鳥　野水

秋水一斗　もりつくす夜ぞ　芭蕉

日東の李白の坊に月を見て　重五

巾に木槿をはさむ琵琶打　荷兮

文來庵社中覚書に先烏賊の句ハ長句なるべし次の句の時鳥謎の
句其次にそれハもりつくすと云ふ句に志て次の句ハ秋水一斗にて
酒刻ひきのあふ求きおよび謎を解きたる句なりも李白ハ寓言
酒を好む人なれバ其名をのりたる句琵琶打ハ唐へよせて
巾を出せる句なりといへり

箕に鮗の　魚をいたゞき　杜国

古歌ハ下野の室のやしまに立つ煙が河内の代に浩所し
やくらん此家ハもさゝ次の句付けるべし此句ハ其場のつけ

「日東の李白」韓客権學士が丈山に與へたる讃辞なるよし、「覆醤集」の序に見えたり。「坊」丈山の閑居、加茂の清流子のぞめる「嘯月樓」にや。

ゐて別に論ず

我いとゞ昭方の星をゝむ面〳〵　荷兮
ふゝいのもの　眉かきに　ゆゝ　師水

月院社何尤の七部大鏡一書に云妹ハ君の嵐ぢやとも
いふるに妹ハいまゝ伝の乳飲きに眉かゝもかきてつゝて次体也と
さもあるべきみや

綾部へ居湯に志賀の花漉〳〵　杜国

國史に按るに滋賀の郡ハ景行成務仲哀三帝の居に
志て高穴穂宮と號せ又大智天皇六年三月十九日志賀の
宮と天武天皇元年都岡本の宮に遷せといふ淀陶潛
以市渡酒と云渡の字に伝ゆ釜の磐風精也
桶の上に渡備といふの説清ちりあゝ花漉也ちゝ

滋賀に花漉出ありと云云志賀乃山水を風呂へ汲入まゝ花を
漉の意歟下一浪花の社山の冬の日注解云眉作る人の
業に〳〵祢八ゝに小後の幕に引き廻志て志賀の山の白ゝ
不の小後に入るを甚みやひ引る抹茶見るべしと云あ説
意に侍に

廊下多く苔のうけつゝふ　有り　重五

玉摘の つゆ時雨にて花やの形筆餘情尽すきゝ注解に
ろゝの比老き小苔の花に花は公ちらひてそれに陰侍と作りる
春の日の面るゝの形る風情いとめてゝとゆきを有ぬつきと

打ものとも性筆いまゝ衣に板を次
大川書のこと〳〵も後きてのゝる　埜水

四解に按るに文選左思詠史詩云被褐出閭閻高步進

許由振衣千仞岡濯足萬里流云云樹水かく此世雅情
欲次といへども世世程故果さず今年も五年茶の為に徳
析く裾故ぬ袁杯さ沢こゝろと同書に見ることの嘆自除情
ふの

―ものまこと―

羽鮮小云朝の浪小時分の親想ふ事こゝろいふ食事飯
葬の食とふ八例の孫をふて待ふ思食自公とふ心にて
泊寄事保まて食事をさるさ陶能へ―朝鳥家ふ
嗜ふ男の能此句に合せて感ふ―九四鮮風流と唱ふ
蕉門の高才女ほの自他つの口碑等記ふ傳りて伊の去ふいて
祖の説も宣先のき此いえを
郭菊まて寄る様の羽をれて　芭蕉

注解小云暮秋の侍に成事ふつ考ふ侍の春の事ふ
出ふ事ふ草枯る秋の末まで残れることを云
うつゝふけしと　車ひき　荷今
同書云御車の車とつ考ふとと云上達アの車ふ三駄云
うつゝ物の体なりと女坂のつ考ふ
麻呂の月　袖小箱敬成ふまらん　宝五
掛ける小麻呂八戸姓小て男子の自称せるまつふ詩次麻呂
連ふ人のとき戸姓成事ふ殆ふ〻ふ磨と成せる袖小月ふ世ふ
趣庭せる成つ考ふ陪て車中の人も定む及ふ〻次
桃園成　手折る　貞徳の富　正平
貞徳翁松永久秀の孫永種のまなり幼名勝熊長成九処能
九道逢軒　明心庵主花咲翁と云元亀二年生寛恵二年

十月十五日紫宸殿にて四位山城守有実朝臣奉行の儀式
刑部卿の明皇二月の行幸に高力士が唱て羯鼓を打つ
所を曲水春光好と名付く 関白殿 花抑皆開く山の
七郎左衛門尉 洛外小五国の列 羯鼓小桃園 桃園
附録 条菴神覚書に云古人の名を押出してつける事
なり 七郎左衛門つけさりと云七郎きの小表の三字を
知るべしと云一格と云へきなり

兩十八 ゆる 浅香の田 標ほり 杜子 杜國

曙左郎七郎註解小云浅香の沼八雲抄に摂津小ありと
北沼の田小 城池の麻小同り 杜てきこ所々 自然の風
はしとさもゆらんかや 注解小云井出の蛙 城とりの也 浅

地の中 城 麻 云 注解 云 注解 云 注解 云 小 の
名の日注解のすこ書 左郎七郎注解 城 より 地 唯
七郎解といふ

奥のきしき 沢 小 ふ 杜子

奥 俳抄小 背 さく 名 て 沢 原 落 心 て き 山 き と 不
伊 其 者 知 き く 其 時 沢 風 る 二 句 篠 情 を 小 不

床 梅 き て 猶 き 八 い と 出 ゆる 男 梅 今

注解小云 口 れ き 小 ふ く 人 城 傾 城 と 見 て 故 の 如 の 城 杜 ひ
山 く き 月 城 小 風 ら ん と 傾 城 の 心 城 の て つ け を 七 郎 解 小
恋 夫 女 の 拒 女 を 小 ら ら ら 城 里 芭蕉
紅 さ 海 さ け の ら ら ら れ 朱 さ 海 く と い え も
七郎 大 の く く 一 年 小 幼 き 時 言 ひ ち つ け の 中 郎 り 城 女 の 方 ハ

領城ホリ領の妨をなすりとゝ云はるゝ小其人余て男女乃
差別那一位等の事小なるて未遠ゆき繁き城みつゝから
恨なるゝ事ハ知るすゝ

にわとゝ病をちきるゝちのゝ有れ　婦水

注解小貴ハ領主為者いふるき病ゆる故小人小嫌れ
なりと思ひなて其病城ちきるとハつけらんゝいふ男の方と
定免さるゝ人の自なり

明月ハこのゝきゝ小首送て　せん　重五

四説り籠城防戦乃御為て敵の方へ首城打らんゝ
覚悟城きて免るゝこゝ乃病ゆて愧なれと名城打む
三勇将の面新なりといへすさるあるべきゝ小や

小三左小面ゝ世ゝ世ゝ　芭蕉

是ゝ最後の酒宴と注書さる小三左ハ新城主の近習小性
成るゝ者ゝと作り人名有能のまゝ小ゝ同ゝ

月ハ来のき　牡丹　ぬれて　人　杜国

此句ハ甘場の院向なるから吾秘花の牡丹城盗ませたのむ
雅楽なるべき小や

縄あゝのゝすハ破き　碎落ゝ　重五

注解小者ゝ牡丹の場のつけなり金殿玉楼ゝ作ゝ小のたら
家ゝ思ひなゝす影ハ俳諧のみなゝす世の中の変化なりと
知る為ゝと云へさすゝ七部注小まり場のさ海ゝと甘ゝ花ゝ

大門ゝとのゝ地義きる　町　荷兮

甘場のつゝ石工ゝ家ゝ為さ海ゝ三船云鞠場の河る不
寺町なゝ云ゝりゝ又通ゝ次第

初花の世とや嫁のいそがしく　杜国
一本世とてや嫁のいそがしく作まり花笠云詞れのつけ之
地龍ハ小児の是徳に建るものありと見て死出る子が吊か
親あすいそがしく花を飾て嫁入に出る親のけと世常の通
が観ほえてあれりと思はるに地龍きる町を嫁入の通りのれ
見て観おつ事暇も世間の何と情に仕けられ侍る
かすみいくらの春の雨のゆき　野水
按せるに此つけ方の諸説紛様て一決せ次かねの上す
其場の躰と見て姿情ハ言外に見へ侍らむの一三躰云嫁入の
けふひ人の毛女のやらもとと深く定む處の句
樵に年に降出る頭やほのの方る　重五
師説擁筍ハ女の細腰かうら傾城遊女ハ科きらに出ぬ法へき

女のあれそ腰の一つここもまでもるより毛とふより傾城の闺と
見るつけさといへて比痕の手蹟なるより但其場のつけにて
添き意味なし
箒聴を併経とす　て　芭蕉
茶筍が院と見るつきて紙縄ハ麻紫出る用にや世務出て
箒も聴てあけとと成る
体隙く植ハ林の葉さびし　野水
三味線のうん不破の一群　人　重五
篠隙く植の葉を抹より不破の関が思ひよせる一藝
この林名前へ附けしさまとして
屋もの多く法ておちる甚だ忌き　芭蕉
抹光る此　物も　七十　杜国

旧説に若き時ハ袖濡も恨めしからずとハ女の忘れ難き独寝の
夜とハあはれなどと述懐の意をあらはすとハ不破の兼純
情なきものから抹茶ハ其人又自の句三句つきられたる故ぞ
美人に対する故妻化何る能

奉加出て此堂に金うちなび　重五

愚云此掛のつきにて老後の感情ハ二句の余情勿論なり旧解
に我ハ七年になりひて老衰旅逢ふ者に若き者のハ即堂に金銭
運ぶことを嘆き世を忘捨てつけたりといふ北條の此句なり

窓に手書あるら落掛哉　吹てき　野水

月にさてる唐輪の髪の赤ころきて　荷兮

注解云兼好法師何謂杣にて延縄ける扇あれと家に住し
意なりひて唐備とハ作られのし又云唐備とハ兜猫の事なる

にてそなし只しくる巻ける髪の油も用ひされたる赤枯をいふと云
愚按るに月のさし入る窓のもとに我美と見るハ見へ侍りてうき抹
刈し侍き情の窓てきも増る女人の浮けなり　但唐土にて蒼振
哉赫跡といふ唐土の北京に所へき能

恋せぬきぬき　臨済を　す川　芭蕉

五按するに向ひ付けたる　彼ハ邪婬の破戒無慚なるにおき
示ハ僧衣哉供養せる女人は母の感深く兄弟七郎太の身に
臨済の母ハ至て恩愛深く遂て眼をなきたりより禅師の
母とみえへる付句へしと云よ未ぬ恨せてハせまし臨済ハ　云礼
宗門の僧とみえて招く戻し

秋禅の虚（カウ）に　声きく志門の　さハ　野水

旧説慈照院殿のおうさ小やうの都に都の御ぬ篤の春きけハ

うまれぬさきれ父ぞ恋しきとはをしに秋修の虚堂
きくといへる其句似のよひて臨済和尚の参禅成さて、此表
きさいへ次彼の古池の蛙の音と云虫の音かまく心ならて附居
せまるをしといえとも雪屋禅寺年寄の声禅成りといひ古方ハ
評小差中の寿老之とやせし成も

是より八　典侍の局の　内侍歌　杜国

職原抄云典侍相当従四位掌同尚侍其秘抄云四人有り
此職尤重為御乳母之人者諸大夫女聴之内侍其秘抄云
掌侍正四人権三人権自上古有之此内以一ノ内侍ヲ為勾当ニ
七部解云此職あたひぬき句とつけより按するに平家物語に小
文治元年五月朔日長楽寺阿證上人御戒の師にて女院落飾
典侍局阿波の内侍法体ましまして同年九月の末小原月

山居文治二年四月廿一日後白河の法皇小原御幸万里小路
中納言資能卿等供奉也　御製　池水に汀のさくらちりしきて波の
花こそさかりなりけれ　女院のおんよろこび就て哀御むひし
情も深く事しのへる体をも思ひよせて作出るならん

三句の花蜻蛉尾長の　香　重五

按るに蜻蛉の名緑紅白五色の種類あるを大明一統志に瓜哇国
所出蜻蛉山にすめり其山よりあふむ此等其小なる者を鸚哥と云
尾長きるハ嶺東の山中に多く有りて犀象鸚鵡内に八哥あるなる
よし和漢三才図会に見へたり此つけは前句を森中と見て上巳の
節会を花やかに句作られたり師説に是より合せの執向にも
せまし悠々と花を哀ふむ何に句作るゝ所ちりしと云一説に
三句の花ハ三ヶ月といへるまで三ヶの花とつけるとみへるもとあり

仏きゝ三日上巳の日〜定むゝ見せ云今の花ゝて古今三集の俗
源氏云今の大事の姫君秘蔵の花の見と女房の筆ゝさ面白いえ定
足へゝ物語角ひろ〜云今の花ハ内裏の闘鶏ゝ忘ひ出せ定
名軍とゆきて見ゝ定むへきゝ

志らかゝいさむ　就のこと　刈　花の今

梅ゝ小白梅を志らかゝといふ古歌ゝ思のゝゝ白このみ
ゝ志る離まていとゝゝこゝる梅ゝ忘ゝ上巳の晴天を
ゝ云ゝ姫ゝ面ゝ〜但尾張ゝ東の山中多〜ゝるゝ
ゝ就ゝ就のゝ〜ゝをつけゝるゝや七郎大ゝゝゝ云
出羽ゝ就姫〜就ゝ原のほと吹角つきの海辺山林の中ゝ
姫ゝ問の小社ゝ往古ハ大社ゝて一ハ鳥ゝ神其ハ猶信刈
ゝ神ゝ種ゝ根元鳥ゝ神地ゝ神ゝて濁酒刈ゝ世慣ゝ

祈はゝる所ゝ三月三日を祭日ゝ中古まて大礼行ゝ者ゝ此
男女老若梅ゝ姫ゝ来ゝ就ゝ〜ゝ梅ゝ人名謙就梅〜ゝ行ゝ
梅ゝ列をゝ〜ゝ廣家ゝさゝ終ゝ其性活就自賀の社壇ゝ
値ゝ〜ゝ刈ゝ神ゝ此献物ゝ梅ゝ梅ゝいへゝ者ゝ句軍ゝいふ〜ゝ
梅ゝいさむゝ〜ゝけて着ゝ者ゝ梅ゝ〜ゝさら爭ひゝけゝ者ゝ上巳の節ゝ
花やの所ゝハ二句の餘情ゝ人〜値ゝ人ゝ

杖ゝひゝ事　僕ゝ十歩

ゝ〜ゝ梅ゝて月ゝ梅ゝ就ゝて　霜ゝの歌　杜国

梅ゝ小茶者ゝ着ゝ古語ゝ所ゝ〜ゝ本ゝ〜ゝ漢食貨志云正其
経度ゝ六尺為ゝ丈ゝ丈ゝ十ゝ八ゝ六尺ゝ丈ゝ刈ゝ〜ゝ成ゝ就ゝ指ゝ
ゝ刈ゝ〜ゝ解ゝ〜ゝ北句霜ゝ字出蘭集木槌ゝ霜ゝ
ゝ師説時雨ゝ定ゝ〜ゝ霜ゝ流変ゝ雨止ゝ爾梨ゝ

雨濟指之霽一史記宋世家曰雨曰霽鄭玄云如雨止而雲氣
在上者也と見へたれば雨の為まちまちなやと雲氣上ゆりて
晴きより月のはられて狂ひらんと出る意なり霽の字は用ひ
やすきと俳諧に漢字のよるべからざれども其意の所出既味なる
屋きて風雪淫酔会僅小十おの百ゆもたるこそ見まへ　こちまち

月枝に残る有為悔恨の感なりと見へたる句へ

十おりいくゆく　水のいれつ万　主五

旧流庵の面ゆきまく乱のぬ小夕会の空きりけれく出る月の如くなる
てく志ゆのいまさかそうあ庵の水の上ゆちらと月新のうつる
ゆき枝稍つゆ小比喩して井間の餘意枝のつけるゆくいか
はきまとハ主常軽妻の姿なり
　蕉翁の業枝初拾人の夫ゆ負ふて　野水

按せるゆ初春の天翁ゆこの居を牛城狩人の夜ひるゆらん
拾ひ出ゆきゆ乃姿見へ

北の御門を打て　あけの春　芭蕉

師流ゆ北の門ハ禁裏通用の出入口ゆて紫宸殿の方北
氏の御門と遊へ武家抔の古実と初拾人と見て杜子と
馬雀のく扇ゆ風のこうち　のまてて　梅今

旧流地紙形ゆ作木ゆ枝ゆて馬雀異枝のきよせるゆ和風庵の
云云師流風ゆうちの居ゆ人ゆ例の作り物りと云へる
　蕉翁　湯者おしむ船四の蒲矢　正平
　　ゆくゆけゆ拾ゆむ姫の引きて　主五
源氏月雪ゆらゆゆいとて心と石発する心と呉牛集ゆ
ゆきてゆと行ゆ　又行つくハ傳と加出ゆつゆるの義ゆ原氏

桐壷の巻にいのちみ埋てくものにおほし一つゝきまかりす
侍りけむと云注解におよそ源氏にいへるは非なりまさに
つゝ叶はぬに出さる所なるべしといへども師説一句に抛柱ひの所省て
おし付けも其の身より情を記し嬉しさも尽せるのつけあひにて古風の
つけと見て於くへしと云

牡丹餅や川になさき　くらかる　杜国

大和物語にむかし津の国に住む女ありけれはよまむと男二人
なん有りける一人はその国に住む男姓はうばらになん有りける
今ひとりは和泉の国の人になん有りける姓はちぬとなん言ひける
斯くてその男ども年よはひ顔かたち人の程只同じ様なりける
まさる心ざしのまさらんに出りたる道を見と思ふに志の程ただ
同じ様なれば猶其にきあひぬるものと聞えれたる堂閑

様に言ひも此集まりしいふべくも何う次女おひとへらひぬ
時人の心さしれおなしものぞいはまにもあふまゝに似と見られも
月日を経て家の門に立て方に志ある見へればいはむとをもも
此付りも同様にもたせる様もてりもいれ揃といろいろにもちて
さてり云云思ひ寄の付にや鍔へき杜国云おとき於てはの要を
思ひよせしといへど蛇の諸話の牡丹燈の付句にはいさゝかなり
佐へ寄や其出て尋る人の心によき趣し

露萩の角力ちかうし城様もなく　芭蕉

露萩のはまのちかきに住まると其力てきこの起甘塔
つけにして餘情は離子の落花も見西へきゝ旧説前句総篭
付情なるより艶なるみをよせて露と萩とのつけ合せなる
へしといへども師説此度や付の情より角力と運ひしくし

半過たる

古井戸とゆも

蕎麦さく者し滋賀楽の坊　師水

滋賀楽ハ江州の南田上川近辺なり清白色の磁器紙
半し信楽城ゆきと云坊ハ町旅宿なり見萩の撫子つけを
秋ゆきなる時節なりん花の時節小原なるなる
秋涼ゆさらし三船云滋楽ハ宮居の名なりと云へ　杜国

朝月秋ハ白らちの旅衣　一々
白花買みちゆ小ほゝゑをきく　若今

時珍曰至五月開花如大蘭花而紅花侵曉柔花之朝月秋の
時分をつけるなりん秋ハ赤ハ必ゝ紅花買ハ人と定めた者し
赤ハ間のもはとて雑を作るなる　師水
雑作ハ向附なり注解其通のほとりのはゝ　きるら茶漬の

俳諧と詩て紅花ハ雑のうら作ゆ手柄すとさも伺ゆ
余婦の居より　米なんと　ホ生　三五

四位余婦ハ禁中女房の名なり俳心義小ゆのとハ禁秘
おゝ中務内侍不著徐物類也是昔第二余婦大和物語小
昭の余婦源重信語小ハけいの余婦ゆり物余ゆといひ伝る
なゝし持是ハ後人仮物せらるゝゆ甘蔗の中ゆ甘蔗の
ほゝゑ云ひゆる

まゝきまてゆ赤ゝ小ゆ見れゆ　芭蕉

まゝ甘蔗のつけゝ米の松りもの城枝ひ米ゝ〳〵ゆ行ゝる〳〵
俳くふゝる　奥ほとゝき　ゝり　芭蕉

五月雨のつけゝ七部大ゝみ小徳物志度の浦去田の作年芭蕉
上人のまゝ絵小より一心会俳の好者と句伊予浪小て潜小ゝちよせ

きる鮒の後より来る心の作の浮世を浮き事なりと云ひ流れ
行く品川鮒既に浦島寺の像ハ鮒の後中より出現せと人へ云
ほとゝぎす科理せる事ゝ北等の社ひ船るへきかや

縣ふる岳見次郎と　作のれて　重五

七詩投世界同流小日向の正伝某次郎と云ふ者あり家居
近郷小待歌連俳の風流城俗て花見城なをそをすり名ハ
言へて花見次郎〳〵と呼ぶ一事なり縣ふる八田名考る
きゝいふるゝ附心ハ貴人なり春後の俳二句の風小昭らの名り

五秋　董ゝ　畠　六　五　杜國

注解小島次ハ花見次郎踏着小ゆ今ハ断ニ立至るの
拾細も荒ゝ五秋董のゝと世を流し居ると云を西来る小
花咲ける老者なる故小多ゝ北拾細の内五秋をこれもさの年て

年ゝと見て子細なるすゝや　野水

真夏のつる北　浮ふさ　うの目也

岡崎や　矢刺の橋の　ぜき　のか　杜國

東海道ちゝさき北橋ハ拾桑第一の名橋小て七さ二百八間なり
徐流の馬の陸ふりゆゝ七まきを橋の七きゝ小ゆらゆるゝ矢作の
里ハ日本武尊る東征の時作矢奉之見者て不審ゝ俳諧をゝ

在原のゝ川を　よみて　送り　ぬ　荷兮

廿人のつけ小て橋のぜきゝ小ゆ〳〵とゝ心ゆ〳〵七郎
大臣小一首代引て云矢刺の里在原の庭家小大きゝ松ゆて
世小ゆ〳〵往来の旅人ゝ花見て見物ゝ人るの享保年中の焼失小
なゝはりしゝ云へ

橋ゝ　ゆ　ハ　笠川　桜ふのひ作らん　野水

注解に云小町相撲に負たまのきの浦
松を立まき此ら城原て小町を捨てと伯母北子を養の
ゆりの元人捨さる少や大和物語に曰おき宮の捨さる松れて
千代経ふる心地せられと云意法師の屋に植る松の木を
見て死母に思ひ出て死せるに伯母捨さのゆくへを尋て捨子の
成人せるに情乃性をいとしくとも子を子の母の捨たのられて哀
は捨子に捨のまへ捨さるとは定なるべきを

梅日を高く　刀　うる　年　主五

師匠是を笑句より思ひよせさる情に捨子と格別心なる所に
子を捨さるに捨いそもも刀をうると貧乏の三歩に成る歌に三句の名に
昭らのことに人を泣人の元男かくの作さる哀情に作り侍り　北老北
秀逸なるよし

雪の狂吳の宮のかた　孤らーき　荷兮
恵崇の待に笠重吳天雪皆軽楚地花向ひつけに て風狂の
味まるなり

襟に　に云る尾の　片袖に　ふるく　芭蕉

七夕大隈に一本に彼雪見の風狂人に高尾の片袖を切て襟老
なり吳さる俱に悲切る大意と全盛の位ら反て意義死る
ときた向に附なり貧乏人に風狂人を向せ又拙居に向て
三句の運ひ　見に天居人の位ひ云て捨に風狂の
為に遊君の片さる袖を襟老に去て附て言樹に倒の和歌に
高雄に伝へ云へ次と云なり

捨小石ちさん　主五
捨人と　捨を
劉伯倫性嗜酒使人荷鍬曰死便埋我云云

可笑所師既に六句の附心を動かして其人の自の変化
あらしとふ

芝子の一と言ふ名残は　禅　杜国

門流云句の解様人伝聞見性の人と見て一休和尚の例
とつけきらんと云捨てる小芝子の一言と八さの句作例の掛詞なり
禅僧といふ言ふや師流小芝子の一言の句作例の掛詞なり
其六句の名ふ強酒をを禅僧と尼と掛詞なることいえる

三日月の東八ふらく　滝の　声　芭蕉

時雨のつけ之立所のを言ふ心ばかり名を

秋明のそのふ琴ふへさて　者　野水

師流云遠きものを貸借の返却と云流八之る小芝子次ふへさハ
障さるかり秋明と句作る八例の古ひく但禅をきく又琴を

方く耳ちるち一虚栄なるの調也七詠流云洞庭とのの
捨て秋の寂をつけて唐画小猫の姿作り是八琴ばかり返却
さる方とと言ふふや

京ふるるちゆるて七世を放　ルる　杜国

楽伝云絲声哀怨ある小北ばけ八本句の秋明寂寞の付歩の有
琴の声をきて凄切にて悲哀の情ひ如て詩る風流を放
して帰る女房のつきふて女人も思ひやる日光板流に乗り
移る兎を放さて八伊のなふや保次辛意之年去へる次と
ひり物花ふへ

寺上のき　会佛　茅の外　備る　梅今

師流小云琴をきして奥を放一又会伝ばきく歩ばば現在会佛も
現在三句の落ひ日ひく年を加ふへる次とひり思ひそのふ是を

禅てる小坂のへさきめをと道知もせる時ハ其難所又琴の三せめ
奥我放せしとき〻時ハ此句向附と言又難所北れる林間
尺〻小琴を撥へゆく道を小やかりる小や巳の琴故撥ゆるかや
知るへの〻法道知とはてハ一句の上はなき句〻花き弾せるる小
法をへき小師院のてく知るへ一言るるを西るを八是琴故きて〻る
其人小て鬼の差別なし琴佛八を此ものの唱小て化よを
尺〻る句〻言ならく其耳の流のきハ花をさまえて花のきる時ハ
人小接るへの法師説を心そて軒〻知く解花へきかや後時を
すり

このけ〻きき切れ小死化て〻　野水
会仏式きく〻る其人〻海おのさけ〻きく〻れき伴会〻せらる
おもひの海門も知るの　常り〻く　重五

又其人なりやるかなかきを意の心意なるや
古のまてふたまーね　苔ののけふ八つる　荷兮
山家集小ねこのる心八さても山さら都れん後て者小のへるき
又すは此山相の法式尺一日まる心八者小もそはさ句り小紀
伊勢物語小思ひねこの出小一視の海るなられ知るの尺人を
玉むきひせて古のきそふ視八茶句此つ者〻花八定なり
花と尺て花く所其人の附小て意句〻いと小一

りけもなのはを我も同一〻く　芭蕉
西行のこ小称をく八苔のもと小て毛乳(イセ)なんそのきけ〻き此
空月の夜花の新小入法る視八西行ふ法へと尺て意る又
称をーきとやされをらん二句一意小つ者られて意同〻と
何るを花の歌小て北なんるを上人と同意小教〻く者と

解るべし。其句に於て一つの差別の理二句一意にして一意なるさる不味ふ所一有心の一句なり

なほ俳諧の句なるべきを知られと

炭売のものの一句古て思ひの外 定五

万葉集人麿の哥難波人芦刈小舟とおのの一句さはやかとさめつらんきれ此哥を示書ヲ一句に其句に其句と書を

定家卿秘抄に詞はものいはんと云ふ哥を云とよむるはといへり炭売に詞はせをといへるも面ひきてけられと炭売といへるよせも侍るべし

さのるの小舟句炭売の詞まは色黒きと言ひ又色白きとをいひて諸説もの一抽る小舟句一句の上にて解て附は炭売の一句は色黒きと治定せへ古その第五けせて小酒ふ所れは黒のうんといえるを炭と云へ又茶也

人麿のうさはきてけるを家小舟とは詞も素に成らしく云ふ能へしと乃心ふも通ふ所れを炭売の一句を黒とは定定の一又茶也

反転せしもの侍るべし きるも去てけ侍れ云ふ所と侍るべき意ありされ炭売の

茶を白しと定むへきし茶ふ句重の意を案一かくはこのき

句とは所也師説小炭売の一句の黒きわや白きふや重五ふ

きのされを去れ侍きく人の心小俗へ古集はよきものと先哲

乃いえるふ迷ひ眼昏のなるはさるは二百人ふ弦て論をるは蓋

有りと所り此句を抽をる小北句一句の自ふ業を以て其一句の

黒きふ決定へ人麿のうさはと云ふ心有れとも

只貴上の句をのミ写りて茶者と去れは其言を反転て炭売の

一句を色黒く侍る十白く成る十 定家めつらふ侍るまの一 芦刈とし

屋ハまくけされども世をくまはけて行るまき事ゝと解せ侍ハ
花ぞそひて松のからんかやや

人の化粧せしこゝしとき　寒　荷兮

鏡ハ射つゆ冴り寒き夜の星くゝ世つ陶ぞ思ふかくゝとき
忘れをくゝ他人の化粧の為ハ手鏡ハ世つ陶の紅粉の
為ハ世つと射てるの附ゝ論説ぞ師説云
商人ハ蔵人ぞ夜ハ鏡とくゝとの射附ハて鏡とき夜とハ
何つゆりて不自在見古風の孫をりゝといえも

花薄馬背の雲ハ暁　このえも　杜国

四説ハ北と先ハ五字仮名又歌字数の才三といへも異説を
企屋ゝ沒附意ハ世つ携ゆり鏡とき北ぞきハ日の影ぞ初め
花薄の雲ハ暁ゆりる行くり出て隠くれも行をきき海

見ゆくる背の肥ぞ為ハ薄の陰ぞさゝ分るべ　又のゝとき小
雲ぞ為ハ為のほとりゝ見ても去るべきハや成説ハ内心如歌
記き行ゝ見へゝ枯背ハ青さ為てき霜ぞてくるゝ毎
ゝる婦人も思ひ合せらるべ　三脚云　蕣る桂場なゝの様ゝと
さゝ行るべ

鶉見るすゝの月（カ）　ゆゝり　野水

北つけハ世つ携ゆりて月ハ天柄の毎合せ為るべく外ハ子細ハ
風欲思　秋の日　瓶ハ　周れき日　芭蕉

按るハ北白風ハきぬ風のぬ方流ゆり隠りて存せるハ為を次
性閑為ゝ寂寞る侍れ為ゝ人ぞ為ゝ風ハ為ゝ四て
静り鳴る夕雲の景色言外ハ余ハ勿論為べき先

萩 織るこのさを一本小振まる　羽笠

是亦萩荻の二流ありて萩の方用ゐて荻の花当季の
ものらひて振い稽ひろ大つきて人ひてらひてうゐひちく枝い小
風一振くゐといふかてし　兼好の伊勢物語の里小むりろ雪のを
俤者の世をるうに用ゐべき歌俳に其場て細ゐ

賀茂川や　胡麻の代祭徴を　荷兮

師説京都賀茂川筋小箱屋用北社胡麻を始ませ来ることひ
なりて世間其辺小胡麻を作る至て実入よきとて是故胡麻の代
いちりと云又手と世の社とゐ小浪合て出来故胡麻の代
まりといふと故三騎云胡麻の代九月初手ゐと他俳心
花の方をゐ世ゐくゐ小あるとゐる時節のつけし徴の字やと
訓も陸機文賦小微忽五臣曰調也と見善と今やと訓とる

寒き厚

岩くら北舞ゐ門ゐ　の北　重五

岩倉ハ洛外の地名ゐり祭小ハ必ず舞を来へとゐ門ゐ
但同名の地名ゐ付ける例ゐ世

柳ゐ小と布　摘ゐる小　矢をれて　野水

柳ゐるとい入る娘ゐ小て付ゐり　ちんのとの世　其人君心
自の句ゐり

うきハをゐ古城　朝る　三平　杜國

山谷四林の待の序小三平二隣道則休と小婦人の歎晨鳧三
手小て両歎備ゐり　破婦の哀知云小九歎と刻せへ　み其
人の有心自の句ゐり師説云岩倉の句を陽城の自也次ハ陽城
と恢ゐ一句の上小位定ゐ　第句也押へて陽城の身の上也

見るべし三句目は例の茶句なれども詞のうて作をいふ俳諧の上手にて
三年とつけて茶句なれば嫁ぜちる娘と入れ替へる御北三句多
於てり第一三句の捨りといひ句風といひ逸せべき差中の秀逸なる
不示りしと云云

捨られて〳〵孫のそだれ哉　羽紅

万葉集小野小町の入江なる藻をとる海人の子のごとくあなく
ろ　俳は世情を本とし面白く作せて俗情なるべし

火ばちのぬし　姥なき人　城　名残　芭蕉

三駅云死人形と作つけ拵きたる体しま婦の死別をつけて撰
古今集小野小町うくひすの小立き人なくてより春ふる撰
しのこゝろ見てきしみいと世見て立きき時はぬそ玉のよる世花城迄
をそ引きまる北うくの心なもてこをき松小古人なもてふ心の情

門出の箱小袖衣　のりてしまる　三十五

是は左き人をんといへるもきくとなくて後子をいたてはるとと
北市宗世其人なり三潭云云の死人を哀小是作りしと云云
第七哀小べ

血刀うくまて　月のくらきに　梅舟

夜ぶてて如々の涙七月きく　杜国

三潭云如々は江城の北東廓山の西の方に撰小如々塚小諸国諸
地名又如々橋々と小名て塚名定なる小なを次時分のつけ
小て俳諧は義京の意筑切もなるべき所

冬の月　納豆くさく米へし　独水

花小臣　撰の衡と　古てて小けるる　芭蕉

餅花小徳　茶兼作る　徳と詞れは世なの花む親相小五月

明くまへ梅のかゝり世とゝ牧世ときのゝる知へ納豆を寺院と見て
梅の花心より散る迷ひ出ぬ花ハ花を知る世捨てるとし徳とされハ
西行の詠歌ハ今すり花ハ人ハ偽へきん世知のされつく山ヤ
ゝ人ハ花と花ハ人とも思つく人の色のそれなら梅のとハ
ルる北三首の歌ハ世を甘意ハ粗ちるへ七部注ハ世中の花の
うちうひあき人心ハひの作知ぬ知ちく知て一朝の風ハ散て
世の花ハ知ちくハ彼の梅ハ世ーの知と其安恵ハ知ひ捨ハるとし
いふ句知へ徳凝の借用英師云遠花ハ花遠月ハ月祥
三ゝとハ一巻の難句ハ詳ハ解ハへの次

僧ものいはぬ次　歌　冬枝　吾　羽公

古今集良峯宗貞の歌ハ山吹の花色衣ぬしハ誰とへとハ
へ次口句ハ忘てとはり世言の行ハ山吹のちき花ハ吾ハ

下流ハ流へる山吹の花枝次ハ知知へ遊世の傳を一ケ世但
納豆ハくく意代のゝきくし飯食のお献子細れ

白莫濁らぬ水ハ　相枝　浪ひ　荷今

詩注云蕙で身世色白暑新百歳蕙世京房易云白莫見則
君生貴安今俗謂莫為天女本朝景行天皇八年天智天皇
六年清和天皇八年献白莫云云附意ハ其場ハて色ゝ也
品義ハ

宣旨うーさいく　歌枝　傳ゝ　主五

郭憲洞冥記曰漢武帝元鼎元年有神女留玉釵遊帝故宮
人作王釵遊仙篇云白蕙飛来白玉釵附意別ハ子細れ
釵枝謝るハ清水枝用るへ
八十年を三月ハ今童女もちて　野水

同院ハ八十歳ニ成給フ時ハ二百四十歳ニ成給ヒ又八十年ニ
如ク報ジ給フ又七十三ハ命ハ八十歳ノ内ニ下ル事ヲ以テ
指花伊勢ニ長寿ヲ願ヒテ好ム所ノ月ノ夜ニ人ニ知ラレズ被史記ノ
正義ニ言ハク王女要流星入口而有服七十三年而生子云々
七十三歳ノ報ハ是ヲ以テ出ル歟ヤ又文来菴社中ノ覚書ニ曰ク先業子
ノ古事ニ成テ八十ノ齢ヲ以テ入ル句ヲ以テ七神大隈ニ住ス上人ノ
入ニテ有ルヤト問ヒ給フ通ヒ給ヘ七神大隈ニ住ス上人ノ
祝ト成テ誠ニ成集ル書ノ中ニ云フ大和ノ竹林ノ巌上ニ於テ初テ
神武帝ノ玉鉞ヲ鋳ル諸ヲ示ス事ヲ以テ百年以上ノ男子ノ親
ヲ召集メテ見ル所ニ竹林巌ハ是ヲ見テ是ヲ知ル
ヲ以テ我ニ示ス仏会ニ関ノ今ノ祝欲ニ云附心ハ叙ヲ請ル甘人ノ
是ヲ以テ今ノ指ヘ

七夕の つゆ　杜國

おのゝちてゐる

注解ニ長寿ノ者ハ仙人ヲ見テ七夕ノ露ヲ仙人ヲ
手ニ受テ寿ヲ富ニ伴ノ句ヲ仙人ヲ露ヲ秋
ヲ七夕ノ夜仙人ヲ露ヲ
ヲ云ヒ又ハ限ハ小中ヲ知ルト荒海ヲ知テ年ノ
一度ヲ知ル一ヲ知ル織女ノ不孝ヲ知ル
ヲ知リ知ル理ヲ解ノ稲ノ次ヲ
親ノ孝ノ知レ天星ヲ知テ織女ノ下ニ妻ヲ日ノ萬ノ
物ヲ織ル先家ヲ富ル　部輪ハ力ヲ清撰ノ月ヲ織ヤト
神祭ル女ノ為ニ七宮ノ祝ヲ又吾朝ノ南條宗勝ノ
祖ヲ天女ノ逸ヒ男子ヲ生ル城地ノ名ヲ羽衣ヲ傳吾ノ
庸ノ織女ヲ男ヲ夫婦ヲ為ル後皆天ノ情ヲ与ヲ千年家風ノ
祖ヲ花園ノ中ノ天女逸ヒ夫妻ヲ仙ヲ子孫ヲ久ク月ヲ

終ハ天元の後句と云和漢是等の書籍多シ又淮南儀象訓に云若夫真人則獨十日高使風雨臣雷公役考父善沽妻織女天地之間何足以留其志云云是等小より前句の意も

て人ゝ仕ふ所と見て織女の句を付るなるべし師説小媒又中断或ハ中隔の略なりと區区の説なりきく人此心得小て強て解せるなるべし

西南小桂の花のつもむ　とき　羽公

西陽雜俎小月桂高百丈下有一人常斫之云云白樂天詩云桂子落新秋西南小桂華の蒼むハ七日の月なれさし七夕の時なんてつけくも

蘭のあふらの小ト木ふり　芭蕉

陳藏器曰蘭草生澤畔婦人和油澤頭故云澤蘭和三藤袴是也淮南子曰男子種蘭美而不芳則蘭須女子種之女蘭多成因於此手竟其場のつけし桂の花小蘭の油面白き面合せ作り次の句の使女ハ女蘭の云てきもなるべし師説物好の移り香り只油を絞る音と見て扨けハ解小なる次

綾の糸小貫かる女　月の宴　荷兮

羽衣小栗伏　況し　月の宴　荷兮

貧家の体なりてつけ之栗小花ゆ次稲米作るべきなり

按後漢列女傳云鮑宣妻桓氏字少君世族貧賤資財甚盛宣不悅妻乃素髮歸侍御服飾更著短布裳宣大笑曰乃是鮑宣之妻也今當奉宣共挽車歸鄉里拜姑禮畢提甕出汲修行婦道鄉邦敬之是等の付なるべき

さやを来て捉子かさる　正月小　杜國

閏三月七日三月八日食ふまじき病人なりと断る為なり　されば江戸にて松竹さて花ひらける時は大白堂菜石の句ふれてる事のたゆるを小花市るといふ　今ふて年の吉凶ふかと元旦陰晴ふ其心得へ　是を時節のつけふて茶月栗饅酒菜蕎ふもてるれらん

たくさを向る　無茶の　宮　野水

七部注ふ云身延半泉不動院ふ無茶の宮は荒人神とふ近村隣宮信仰甚〳〵此像城安新の宮と次是後帯りいふ拙るふ世情のつけふて拙子ふ安産のやうよせる所へき能東海堂菊庵の降ふ無茶の宮は今子の宮と称せ世ほの宿ふ来れはへ師流つくふ大敵なるへ　拙子と作りも如何なるなりと云云

寅の日の祝〳〵城　乗治のそく　記〳〵　芭蕉

七部大磯ふ虎ハ猛獣ふて風城引る故ふ寅の日城孫ハ力ふ虎なるへ　寅年　寅の月　寅の日ふ打る刀城三庶と号　伊豆極沢月納め〳〵之熊云拙の甚さる孫之師流乗治のそと甚能無茶の宮日の庶ふ論てるふ為ふ次是云寅の日のねさと称る平旦寅の時なるへ　甚武ア五郎記ふてらの日のねふ敵上人ふいるとは　丑節ふ申の辰の日之

くもかくちき　南京の　地　羽笠

注解云南京の地ハ呉の王将城甚ひ為せ〳〵つきらん南京と呉の地なれとも又南京ハ奈良城いえると考へ　師流南京の七月を孫ちうし奈良とも唐とも云へて於へ　子〳〵人ふ位せへ　但筑又ふ用る事雲かくれ　いつきて　誰とも去ふぬ人の　像　若今

師説いまハ論なく瑞雑なり蓴を用ゆ※如此なるを井の姿と
見て井垣又ハ囚起なるを井ゆかしいふ田のすゝ句意ハ解ゆ
乃ち次南京又ハ奈良なり無我加ふるハ入ほのかゝ女塚のつけし
或云奈良の町城僅に存して大和西相秀長の像ありし田雑
廻さく今ハ不の農夫も言ふてぬもの多しといふ

泥ゆさて祢のきよ知　芹の根　重五

学記曰大学始教皮弁祭菜示敬道也注云祭先師以頻藻之
菜示之以尊敬道也魯頌泮水詩云思樂泮水薄采其芹
陸農師曰芹取其馨也清容居氏曰古人祭祀不用園蔬雖
其蔵而蘩也故采芹頻芹藻以為俎春秋傳曰苟有明信澗
谿沼沚之毛蘋蘩薀藻之菜可羞於鬼神可羞於王公云云
本邦正平二十三年八月朔日鹿苑院殿義満公丹波国より
芹を献ぜられ天下紹平の兆なりとて嘉儀ありき　京極道誉の
禍ゆゑ見へさる芹を先聖先師ゆ献　嘉儀なる事古書ゆ多く
見へさる異事なれ共北句と附心就考る時ハてさらん俳ゆてハ
其情なるへし　師説ゆ芹の根ハ附方き出へし俳句と考る時ハ言葉
異ら次其不足なれて見る時ハ二句の百ゆ俗へ俗ねれ俗句と解すり
外ゆ無き事あゝ後世ぬきゐてさるつけ云ゆ此附る時ハ
何ゆてゐ附のさる事ゆ

粥せる　暁　姿ゆ　ふこのゝ　海月　跡水

注解ゆ清貧隠逸の境界なりつけ句と云三騎云芹の根ゆ
押へて七行粥と附句ゆ暁の光ゆ桜ゆ三月寒食の日本粥松事
粥の類ゆ作るといえ共句芹の根の清きといふ句寒食の節ゆ
思ひよせて古孔華の粥なるより光ゆ出ゆるといかせ　ゆや師説

若すゝきひよろひて那ハさる事なるへしとも其所弥生なる事ハ
茶かゝ古簡なると解せ時ハ昼寝り弥を生る残れやの寒りしハ
流も炎暑を防ぎ涼きを見せ吹かしよめ立き北窓すゝし

物衣の乃小よろふ　たる風　芭蕉

掛る小茶句枕陣中とて高有心のつけし花やかな織物なれ
出る若大将や保元の春思ひやられ侍る師伝是ハ有心つけ小て
字句簡要もきく若しの次如ハ物の撓すり追ふ行て要ぬけ恨も
出来て正風の全体と八成へき也て底するとなり

北の方ゆゝしさうされ　押やりて　羽笠

掛る小茶句枕出陣と見てる向ひ附小て北の方のうれ也打ふされ
打やりの小伝画くのてゝ原平の盛衰元弘建武の変動小のる
姿情八多なるへし　師伝小茶句ども巻中の秀逸ことい元り

祈られぬ蛍を
其人此有心小て抱ひ附小ふのる所しされ元ひたけて
探もやられぬ小ふ所ゝぬるとゝ元へ村雨音の耳小入りて也ん
ゝとゝもとのちる小ふき人も伝ふ侍ふいとゝ立られる
袋小て動のちる附句り

書る　村雨　杜国

田家眺望

雲月や鶴の行々なるひ　みて　花の今

埤雅云鶴形状畧似鶴毎遇巨石知其下有蛇即於石前如
術士禹步其石即然而轉云云詩曰鶴鳴于垤將雨之候也
云云鶴水鳥也伏卵時敷入水云云仁丑亦切小鳧也句意
多郎茶ゝ景色也別ニ子細なし

多ゝの朝日の仏をれなりけり　芭蕉

師説は解可解不解ゝして微詠なる事世ゝ称となせを如此孫
ゝ門て先の日とい云る一巻の名と次と山元史氏孫の安ゝの名なる
葬の鳥のむ門のきを合矣さて〆又云指をを門ゝて奉句ゝ
よ巳ゝる侍るべ

椎柏山家の体也　木の葉　ゝる　重五

冬三韻ゝ名ゝ女房成て勅作せ玩味べ〆或抑ゝ新花方
集祝部成行ゝ冬の末て山なれたゝ木の葉ゝ冬なる松さく
葉ゝさひきゝゝゝ河ゝそ姿歌ゝ冬といふ

ひきさる牛の法ゝにほれ　杜國

師説つゝと作る自玉葉と云ゝ法ゝ清ゝ雨ひき
さるとゝひゝほるとゝゝゝ山家の峠き体情言外ゝ見元を
音聲見見ゝ月の侍ゝと　羽笠

同説ゝ男加茂責の体侍べ〆音なきを神祇祭ひ故代衛
もなゝるゝと云を侍る大院注解の通説ゝ門の一月見の次
秋の法蔵の花蓮歌いとゝゝり　芭蕉

附たれて　不二見山ん西る　寺　梅舟

永亨の比将軍家の不二所巡覧ゝ一時の伴なる長谷ハ
廿附なるべ

寂てて　椿の花の　落る　音　杜國

雨後の体情見へ侍る又廿楼つけゝて寂蔵の感慨句編れる
へ

菜ゝ　糸ゆゝ付　降る　風の香　立五

紐追ゝ烏帽子の　女　五　三十　師水

三験云菜平嵩なゝ見て侍る烏帽子の女ハ句作句大ゝ

一本三云木曾義仲の妾巴御前ひも山伏世俗の女中御所烏帽子
狩衣等と称し法華経を抱き給へるなるべきかや

夜小　木曾作る　長の　羽織　衣　羽織

注解云大名花七賀別　業とつけ世俗の物まきに木曾山の
風景を作らせる花子の有るべ　高麗衣と云て唐の
粉ひ形ん等の白の女に毒の侍女小て烏帽子の遊其花毒
有るべき姿とありいそなん紙物ある小指衣を作る物を
色さのこハあのもつ作るべ　我人云茶白の英成作物の人形ち
とり形るつけと粧を小べ

夏保き　山　橋小　桜　見ん　荷兮

夏保きを指衣の時節に成る山中の桜世俗の簡略
但山橋ハ薮椿子　檜牡丹等云指花　西行法師　西行法師

檜牡丹の世俗を檜椿椿を指小て山中の草樹是と定むへ
佐き草　おもき　椿子の木の枝もたてを小ちるが云云山桜
散るべ　西行法師高野山小て詠きける坊小桜の散るの
除らを　完へてよまれ者る　ちる花とり出おもの根小の者てくも
きまとも　や云面のるら　むの衣保き山中の桜見等の世俗
へきや

麻のりと　いふ　の　集　あむ　芭蕉

此世けハ今稀小て佐面草の侍る山里小居移入侍るにんるの
形る苔の細石ハ小ハ心細く住所る庵ハと云云ち
ち椿子めを小てさる　麻つ見ハ宮言なるべ　家門のてき世小左さこの
麻つ見ハ宮言なるべ　世俗の　狩衣　庵と世俗　て

されハ北条門ハさして猶楽菴と人もひとらむと共人を
定発するつけし拍の名人の名我ハ何へき姿小作りする小三方作左文の
てき多く俳諧小用ハ者と荘子の伯牙賛人知遊の我ハ
原

我月おと　牙ハ　俳　俳る　杜国

其人の自他ハ以て変化をつけし菩提心論曰我見自心敬如
月輪奔必集云煩悩雲厚霧而長夜猶深云云和泉式部の
俳諧小ちきを見てきたれ入小るの歌小てせ山の浸月
後夏入於冥氏人ハ俳るると西上るやき見等のるハんと
味ひ知るへ

旅衣　笛小義経うち拂ひ　羽笠
鈴東　ゆるさて　木代の　山月　野水

茶句ハ中納言行平中将異方のとき論不小敷ける人又ハう抗
尾をとて敬き計人の俳ハ敬へ　されハ古小竜果と云者最
二さのをし老人と宝発ら寿永の重衡元暦の資朝俊基の
おひ其俳面中小見ゆをし

骨ハ見て　坐小　浸ちこうちの人を　芭蕉
仁食のうのを　とらふ　志ら発　荷兮

茶畏不ハ以て執句とさてる小や注解小時雨句とのそほ物る
東雲骨の志らくしとてる餘情ハ風のら次と云云

尾の点小　尾ハひく　鯉ハ拾ひ　杜国
俳幸小さ　む　水の　俳葉　壬五

川猫の俳幸と一輪て水毒ハ解ハ俳葉を好るとハけを
茶ハ面の小坊主ハ　て　荷兮

あるべき花の実、さてる蓮の実　芭蕉

柏子の句解べし

羽抜小鳥抜ぬ表小入　片鹿　狩釜　師水

豆腐作りて　母の

見起情のつけし前句の体き仏我書と見てつけるべし

元政の草のゝもとゝ　破ぬ面〳〵　芭蕉

別頭真態傳下州山開祖元政先和尚傳云師諱日政字元政号妙子号不可思議又呼泰堂洛陽之人十三歲而事于近刈彦根城主井伊掃部頭直孝師之妹嫁直孝生直澄姓者藤原氏者石井字源八郎名元政後以佑名為法名慶安元年戊子年二十六告父母而致仕入于龍華豊上人室雜染得度父字半平諱元好萬治元年戊戌逝去二年己亥春母請于身

延寛文七年丁未八月母妹種侵病師躬自畫像十二月六日母妹種八十七歲逝矣師入表室十九日寒氣射肌病根入髓人称其至孝寛文八年戊申二月十八日書辭世和歌一首而閉目云云此附意ハ元政表室の仏前なる面〳〵

伏見　木幡の　薩花哉　うしを　梅今

師流伏見木幡の町〻小菜薩哉摘て挿花形哉〻也

是ハ生業とせるの多〻されハ薩花哉〻といふ〻伏見ハ城加紀伊郡木幡ハ同郡宇治郡〻接世て元政の化度の厚き所也元政薩花哉〻つとせ〻世〻女つけの解なる故以て大の〻〻注解小論えて入表氏時分の俳とせ〻小や薩花哉うたとハ是大抵可て西風小俳諧き性格なる面〳〵

色塗き男描ひとつ秋の海　杜国

まゐらせ候　よふ　圭岳
是ハ上畫と申の意なき故唯筆まかせ猶紙畢る餘情二句の有に
聞らの已但白則ハ底の事を待いえ也
水干の秀句の聲若　やの月　野水
山茶花白ふ　笠の木のらし　羽笠
此句は巻頭の発句の竹林の句をせ狂句に秀句の對する
一部連環の格なり揚句に山茶花と笠をつけて是の證に巻
乗の外なる格外の格にして第三の主水も秀句の肉に表をてき得る
手や連環自在の所ひとしふへき之志有とも春の月伊勢参宮
発句に神祇をきはけ句なり発句の女轉せし匂ひの花の例ハ
阿古とも夫婦の即甚と見て花ゝ座し屏風の影に見世る菓子
直様の付け句なり尤も一昔に存し論を議の速式に

取り始め此巻の秀逸ハ御四句目の所なり芭蕉翁と對比なくれ
きるよし古来より申せり也

追加

いかに見ても　雛雨うし故う月數　羽笠
揺る手に何ふるこのれたく　の松　荷兮

何況異句佳き所く佳き所き有る説ある佳き所を作く所の方所
定むへきかや揺るハ個の揺の手に恥らはふ也てなむと合略
此まえ大なまて揺火といひ手ふて揺火をき一巻と揺火有
手に風とよふ揺様はふら次とも其火の名に味ふ鳴へし甚揺
好宗元よるうち煙ひの御形也牛ひきの松根にと小体ふ
安永の頃也
文化　年下完ふ坐の葉人笑しして　圭岳

大院一条に云茶筅髪は油もつけ次結ひて一処つの強しと下に云てら結の法てんとて傷結から元と云て其様に列て人形にめしるつけも

指笠に　宮ゆ　やはまて　朝　夏の　杜国

指笠は宮方の山旅行供奉の人に同じ也宮ゆ　やはまは東朝歌屋の時の俳に出るべき或は云向ひ山中の宿しとは急に角さられ作る

祝に　指ゆそん月　は　こうそ　芭蕉

左に　指ゆ　その次　岐阜山　焚水

大つくふの句の始は茶筅と宮方の旅行に出て左に指ゆ　在に岐阜山は尾張に其地の風景尋ぬへ一白の詞始まる岐阜山も左に伺るうと一

蓑に雨師接の詞に同七詞蓑を宮風の雨と同の様に紙言に出せる
ばきに今又彼是批判を加へる小なる次幼稚に蓑指ゆ　とはしと
とも馬耳風に聞り其言に対する社会へ見行るべきし一老北
振捨て金言を聞一七詞蓑と云へ一同に よきものと若処を
元の通倒に成るく天国宮方の旅道を出て後の月きてとは
言に聞き丹宮木仏形との神信ゆ　かきて也蕉は　ハ　すき　風の
弥をりぬけ居ると　左人古い元と出来るとの一面の月宮に論を意を
出家の面の月きを見て其つ面の月宮に情より起る処ゆて
推量の句し其きく人に　て白一とも月宮へ一人先の　て我
言葉出して月宮を先宮の先と伝といふとも　古風移り也
其れや若き山の朝のまこと　老ちやれてき　調ふ月と抜句の
宮風の句に　作とも小つの作　古風の句のせんきく　ハ　を意也形なき

相加とらへて論ぜなきハ言人ハ引かるゝ歟へ可士朋者
冬の日の閑吟羽ハ信濃の一茶伊勢より西ハ全左合
夫ハおかしてそれゝ当風狂風より何とゝふとも論を
主意四大家ハ四大家ハ論ちきゝ芭蕉のつぼの思ひあり
地獄へゆきて主丑小路多吉きのされい知るの〳〵心ぬけて
凡夫〳〵と他門へ向て言ハ次秋て院宗さへきるふ地を
嘉永二年己酉同四月廿門生〻需接之同四年寺文
三月再接了

七部集通分巻之二

春の日

師説小松集享三年の撰ふ[illegible]いま[illegible]ぬけ[illegible]とふ
[illegible]のしも[illegible]春の日ハ冬の月ふ[illegible]
[illegible]は[illegible]ふ[illegible]世[illegible]貫心ふ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]人の撰[illegible]ふ[illegible]集の
撰号ハ巻頭の発句の発[illegible]春あくやと[illegible]
春の日といふ冬の日ふ[illegible]せる[illegible]

晴見んと人こぞ[illegible]ひ[illegible]敷田のさ[illegible]
波一舟さふす[illegible]なりゆく[illegible]
いとのとの[illegible]五の[illegible]
さちすりしさ[illegible]

二月十八日

春色くや　人さ屠くの　伊勢茶屋　若今

傳伝按るに屋五八佐利松井半七といひ名古屋の郊外
芦尾村に別荘ありしに昨年に至りて其家立替の吟行なり　七句
春色十分にして接遇　吟出る時は実に幾充若の旅体
世地のおもさ海路のさてのさ言外に満く無量の餘情
有る句　第章ゆと色文へて感深し　但第章の句
和尚尽素名へ海る七里の海路れらん哉

さくらちる中　一つる長く　連　主五

北郷尽寺原にて稼陰の其場に接の光景仏流へて
有者の移画特妙と言ちん哉　発句に地先世ととに
句

山のさむ月一時に　鈴立て　雨桐

山の尽武八時節り月一時と八月見る為武む祢と出て
山上に敏伐造営をとを多く找木伐運送する大音響の
さのさ二句の間に恍惚さ

鐘れのらは　火に　ひろる　芋風

世人のつけし軍体といへとも　殺伐の次味に
須磨寺に汗の加さ　ぬらぬきこのえん　主五

須磨寺尽摂和須磨に行る寺領十六石罪餘上野山
福祥寺と号さ此寺八地情句に二句の間に夏日雨
ぬらぬきさ　ひつく若しきさ海見へ行る

打のく　波　笛外　いくく　若今

大夫敦盛の青葉の笛並ひに旗兵具さ海ちの住国

系福の人なもてつけ子列子子細家一青葉蟬折き
あ人の燒殘り皆奔世の撰定ゆるよ

文王の林小りふる　古　ほりて　李風

又其人のつけし文王の園方七十里芻蕘者往雉兎者往焉
孟子不見えそ其文王の林といふ家へ　古物るとい土籠の
古代指運て事小て廣民子来といへる意代中世一旬ゆるは
茶旬の笛小呂律も其時代遠へ代玉燭調和民豊事如と
志て侍一〜其笛の声代いく〜きて土切代もけそつて むる
国家の民の心二旬の百小志発さるれらんの一 物を業せる刀
文王小周王昌小も恨るへの〜代太平の治代きたむる君代假小
時て文王と小ふ日を元聖代の君へ詞と見るべきされ小太平の民の
土切又小耕作のる代つとむるよいと侍ひき来世て名笛代

いく〜きをるとの附て見るもたのるへきや

雨の百の　角の　ちき　草　雨桐

一説小文王の待小堇菜といへるをもて茶の葉先もきたいふと
侍ひと志ひまても茶小恨るへの〜代葉先の光ひてる草引しる
雨の百の玉代もて時小其姿あ主角代ゆるへ　太平の民の雅和
なる小金稱〜る其徳のつけ代るへ

代茶を一度小骨代ほ〜せ刀　荷今
傾城　乳代のくす　な　代　昌主

骨代ほしく小歡ひ小て九月の待の体も思ひ出られ傾城の
裙のき合せて百の擬文代立て事の百年の命も忘の侍て
同元の歌代結へる惜百小恋代とり合小せる感情百の百小
物を涼

今朝より出て奥の　　ゆめきて　　昌圭
是ぞ鎌倉八幡宮の事なるかや　社壇すて六町
ばかりとふ是等其傷の例かてゝ別に子細なし

黒髪にたゝ掛る拍子きり　おゝ　　梅今
世人の有心のつけかて強かるべき句なるべし　二句の間乃
ちきつ間の上句なるべし　むべ思ひやらる
いとものゝ　おき　五位のたり　立　　昌圭
醍醐原に針ばり士七位に典薬頭に登りて五位と云云　附考
向付俳り　二句の百に医師寿も見へ
拾英集に発句に使れ　　重五
秋名句　掛れ名に　掛る　月
大のゝ寄合高中に難陵に来庚寅年とふものの例を考る

巷に協行の官廳にて自分に掛けさせ後家にて
ろえて小荒ひとり貴殿一住居とせの義を御さえしと掛
此掛に太郎助掛とふ今接待に海の幸うつ所かれり
とかり　世伊に

朝想　おろて　出京　ほく〳〵　雨桐
おもてきた西行　おもたこゝろ　よろん　梅今
何九の大ゝ〳〵に西行谷の例とふ　ふきも　ゆへ　朝顔に海の幸に
西行谷とふ所に此所に西行位るひとり　掛よりてつけさせ
は所にて義　芋院に女西行　おもはいろさよまんと　掛をし
そりて俳り　おり　朝顔に　八幡の節に　掛
銘　親元と　川　二人　て　ひけ　昌圭
女性のつけし　さら　紀行に西行谷の　掛に流れり　女もの

芋俗ふ伏人て句はり子のとーは地と書といふいの
ほとんや　唯隠栖柴門の上と見て走るべきかや

世ふ知ぬつゆ侍後ふ年とをて　雨桐

其人のつけふて驚嘗一句の下を拾伸く真の道ふ入を
きるふや二句の餞情本北斗の附子細ふ考きて別ふ
辭世ふ但北巻のうち神典をこの橋の名ほと〜きふ四句ふ
殊ふきてきる句ありと旧説ふ見へさを

三月六日帰水亭ふて

ならはや　知う川　山の　八二を　拓　旦葉

南都地蔵院拾遊ふ奈良坂ふ般若寺の北ふ向ふ是南都の
北の口ふり或説ふ云今南都の西ふ向ふ日蓮宗喜見院の系ふ
侍る坂者の奈良坂ふり是より橋の成ふる萩の接〜ふ切と心

今ふ般若寺の北の坂ふ通る一名般若坂とふ也道八寺橋の
名木多りとふ徒然草ふ八寺橋ふ南都ふ向ふ北
ふ成世ふ多く有侍りしとへへさを十四のこのうさハ
範永朝臣大和ふて下ふ見ふる時奈良坂の不とを示て寄き
花のいみーく咲る枝ちて行き合ひる時のうさとて寄ふ
言葉ふ〜不のら思ひやる所

面白ふこのさむこのうくしく　北　達　帰水

寺こ参き奈良のさ尚坂つきさを共橋のおそへ所り
　　夢の旅節供ふるうん　　清　芭蕉　荷兮

今日八節句ふやと道ふく人のさ尚坂ふ近りこる孫の
体ふを

賣ぬ一ふ　也ちを　月　執筆

八月廿日　太秦ふ

紀事曰牛祭九月十五日所祭神秦始皇帝也云云於上宮王院庭作牛祭寺中行者著紙衣乘牛出上宮王院前高聲讀誦祭文云云皆白き小袖ゆらたき時節の附也

曉いの小　車　ゆく　さて　荷兮

旧説小北白川の車引り法華堂さて白牛車といふ物是八饗喰品必定の牛車引はつる小や師説花落有車道とて車のみ通る道何り輙のなき所不石我為て其上我四のひ行合る所得次一車向ひ来る時を待て此方より行くといふ車道皆裏門引陽明門宣んとて思ひやるる其人のつけとして車道又大津小も何りとふ物なり半廃牛車の事小附合小似るを

鱈　負ふて　大津の濱小入小ぬり　日一菜

是八大津の車道城もてつけを引小子細小

萩ゝ　倒　次　茅日の　京　野水

萬日京八濱の高松の城をき小ゐを女人の合雑順礼の

との野者もるへ大のゝ一書小万日の京ゝ山城の國

屋敷海りと物なふへ

さ泳ひる木の根小花の新とらん　野水

祇園せる　さもの　湯　の山　日藁

子の旬の魚小倒まて水辺小伏せる木の根の上小ねるて

取らんといふより山中の景色と見て湯の山小つける

れらん陽の山小掛る有るお加れ根伝きて小てる志のらん

七夕けーやつくー北秋伊勢の帯

師説抜萃ハ袂ばかりを伊勢ふ帯ばひけら次國俗こと
いえを思事る小袂帯ばかり丈ふ丈ふ世る句作を小てさる
衣服ばかり華兼小て湯山小抜ふ丈人ばかり所毎ちらん

内侍のえ〜姫代ての眉の図

是ハ拍子小てつきを世ば蛾眉巧粧ハ宮人の居なるべし

名もかち栗とちて中上げ

猶栗ハ出陣の列侯小出る礼式ふり外ふ子細ふき
向附ふり大ふ豊太閤小田原陣の時豆列山中の村ん
かち栗ば献上せ事なりとふ是等ふ伝るべきふや

一抜ふる者ハ一るのふ寺ふれや
大ふみふ千観上人ばふふとふり田舎寺の耕作ばふふら
もるふハ馬ふふへきし千現ふ很ふへふ

十八ハ忘れ門る　きさふきの身

拙漢三文図絵小六盆のふ丈ふ二月十五日五月十五日七月廿四
八月十五日九月十六日十二月晦日ハ是ハ報恩寺ふり出るふや
二月十五日ハ出て帰さるし

見つ来ふを　廿九日の月ふき

十六夜日記所伊尼鎌倉へ下ふを小十月廿九日の早天小
箱根山小て月の出ふ丈ふ廿九日の月の出ふ丈ふのひてとふり
ふる伊小や時節のつ以ふり此巻花引上ふる故可
花の庭小月ば出せ事ふり往古百韻ハ四花八月ふり春の
哀小月花行ふれハ歌仙二の裏小月花ふ丈ふ
百歌の四花七月ハ略て名ばのうら小月ば出せふるとふり
歌の歌仙ハ此例なり　二花四月の巻ばやむへふ次但の

巻かせられる八幡宮の夢十丸施主眉の図画感極
させられる句とて松風菊坂桜尾寺八坂人のつけ
かて製剤三井の未寿有恋のつげとと回説かに見へさ
三月十六日月岩木の田家かとはて

妹のゝきゝてゆゝきゝ揉元　の寿　野水

呉竹集かゆゝきハ珍重と云く是かはの心はゝといへとも
炭義と見て打へ一寸の衣ハぬきてかきへきかゆゝとゝや
見ん墨染の袖北うゝ代りはつるときハ殺風景れらん
句ゝの言かをゝきぬ所一性は炭義一て四葉の墨
はをさる心れり

歌かはる　寿の　雨も　巴

北鄙ハ挨拶の俳ゝ寿のはんらかはて所も所はき成御を作らん

蕨煮る　岩木の奥き者のりて　栽人

屋別名不図絵書石郡岩作村宏海村の迎夜ひ北日井郡
水師山中の地下かは呉城屋地かは人事無間かりて山物は貧
原り茶のかちはりハ〳〵木かは似て非別故赤花岩木鉢
甘色黒く日始めて乾く時ハ赤こゆりて五十百百み濃淡
始ちさるもはり長短かを乾りてハ天かそりかゝ一幹の中か
花ひらきくるみのてき実は結ふ民家呉城薪りかへ炊爨
りり供を酌の臭氣はれハ府下かハ用ひ法と云巴作き
有るの体言の百かを餘情無かゝ又江戸ハ幡辺周中ゆ
出さてよ一近江東地志かを見えさ巴蕉尾命の巻れきハ
他かを寿ぬるかを及を去る法　翁凡内る

岩の間より　里　野水

大つみ小字合曰浦加志度の浦なと心小指るつけなら海上
より見やる風景と云へさる共云ふ小て陶器製造志度焼と
いふと伝る面白く小此所曰まて小辺おつきさる海上すゝん上
る曰といく海舟輪廻さる他より見さる附といふ唐
施餓鬼供志さる場所定定さる句り是我国社中の初記小
有心のつけ句といふ拾遺志さて

秋の和名小　順一　旦葉

原の順ハ清涼天皇五世左馬頭挙の男能さ句後位上
句り和歌の達人古今無双の才人貞観元年年年七十三
和名抄撰さて休のつけ〻

祢て花　四の宮より　唐輪小て　旦葉

文来養社中花書小唐輪ハ叡山三井寺抔の見のかゝ〻四の宮ハ
大津の遊女町なる廿児菖蒲遊女のうたて結る髪なる奇
ひのれの月とあ遊ハ遊女抔云ひよせる〻七郎さう〻小昔の
祢の都風なといふる花とハ賞語句り異按さる小異ハ旅客の
心なもてつけさる四の宮より唐輪小てなきハ異より也くての海路小
なてハ又異より部ひらん都の風の遊女の歩上るて花の風俗さるとき
今四の宮の風俗小まされる事〻或者ならんと四の宮の都小拾て
まさる句ハひさる感情なる

紹鷗の　熟ハ好りて　茶ハ苦く　野水

和漢三才図絵云恵美図宮在四条通室町茶人武野紹鷗
住于富社陣而号大黒庵（俗与武相双也）紹鷗初名武田因幡守仲村
武田信光之苗裔也善茶道剃髪号一閑斎武野紹鷗住泉州堺
後来住于此弘治元年十月二十九日病死附ハ茶人の

陸奥国にて別に子細
渋谷に柴押まゐて音とえん　哉人
井性坊に曰後醍醐の御時吉田家にて御連歌ありし女房衆
内侍女将内侍召きて廉中に侍ひしに民部入道女房此
中次にて此廉の陰に伺公せられるの耳掩にて陰のひくきにまぎれ
合ひてきてこの君侍る花に紅連翠と志なさりるに為敬女将
山より柴を折て陰の侍る不に立きて侍りきた水を汲きに
有りにより此る弁内侍日記にかきて侍りと水性坊月花へ
さて是等にてつくさるなるへ

岩　苔さり北　　竜に さけらま　旦菜

和漢三才図絵云此物在峯双巖石上難得山人毎則不肩（モノカヒセズ）
而取之處之高山皆有岩さけ　はま丈の巖原生さるれ

大村に綱切つけ毫に入て当とすりて丁をてとるといえて是又
共情のつけなり

苔うち切たる　きぬ〳〵　の月　師水

きぬ〳〵といえるは元意のてをの詞なから苔まの有様侍るに
よる合せてきぬ〳〵の月と言ふ外らん云に不せさる所るへ
江湖抄に四に曇似帯園山腰青苔如衣負巖背　在中待
さけ云きくるいたに八尚ひろんむきぬ〳〵山のをひする八なを北
うきぬ〳〵といふ意に侍て次に苔掛て云るへ　但北角八
月のを岩の衣にうつりさる朝の陰れらん

風のなき秋の月に綱　メれて
是八苔衣の海るを歴めんと漁猟かとと城今をるに
雪羽の鷺のおとり矢ひ　月

大つみに成る程の所の事に侯式陸奥ひくいまし来れる頃
終命なりとて又忘れの城下の時其地に有き人あつめて
知るべし　今其夕人に語るに無　おそり笑ひとなる
陸奥の民おとりなく掛けて知ひよるに成ぬれらん　句の演撰は
其世に集さるとて人さるつけに成や国なるとて二句の餘情有
人へ伝る物なるべし

ゆく河の流れは絶えずしかも元の水にあらず
雑草繁る大和路に夏草に共語らき事は絶ぬ

まく人て来るべしと云る程の頃に成ぬ
つけとも言ふべし　春の日は終の日なり　財心句抜もなきに
次第に正風の時機に移りなるべく表に解せるに及ぶ
疑はされる句は稿四句目解の三句なるよし　古人も伝る

若水に時節つけかへて新に若水の汲きも又れのく侯城
次に拍子のつけかへいとめてさし

追加

朝日城廻るの つ能侯のいこの光　く
行幸の用意せる女人に成つけ申る為に成られた行幸に
名きて仕まつるに朝日の神　き能侯の句　さ海二句の
同じ人へさし

昌陸の　松とは無　御代の春

師説に昌陸は連歌の道もと心御富代の御連歌に年と
拍とに字に賀年集る是に昌陸の拍とは言ひとなこの　さ
年日に成ら

元日の本の同の　競馬　足曲る

飾流競馬八白駒の戸隠奴遣るとしふよりし日の影のる競馬
といひ廿四日へ春ふかりしきいきれふ家八似候ひなかく
梅あれもるもるやのし松柏の木立の影もうらなるまで人傳
一流ふ木の百八門松ふとふれと限りてハせを一或流ハ
ものなるなのまなしふとさらく飾流ふ後ふ

曙の人形牡丹に蔭ふ 風きりり

元三の人形ハ牡丹の富士ふ比一牡丹の蔭に伝れふ咲ける
尺るうとしとし市遍一秋名月や白牡丹さく矢ひ良とふ
句ひ北集脇とし人こ中傳る

撫てら次元日 里の 曙を 三ツ松

三脚の七沐稲ふ見八日向へ接ぬけて曙ふる里人の持ことふ
ふ掛るふ北向年次の往来ふ名傳延神かけて金襴
振子の帯ふひ八胴乱ふ市養のとき云れふ生ふる小女猿
ちんほともめちてはの影も孫ふてりかやく世の有様なる月
里ふ火脇日の扶神光一当ふ小春八を相影さ
登る切ふ三下次かる里の里をりにるとと世上恩情なるん

ルとてふ小松原ふらん牛の姿

三脚云ふ初春の姿ふ主荷原ふなれとも
小松八子の日なるけての作なり夏掛ふる小きれふ子の日
せ一地近ふ小松原迄て周り居る牛のしふ後共姿
ちや見せらんと地回流ふきれふ八子の日りふ八丑の日と
いふふ流向せ一形ふんといふ元日餅情ふ御車ふ乗るせ一
牛ふ八肖白のてもも足へ傳る
朝日 二分柳の 新く匂ひの京

八雲所はの朝日の句へる山ふてる月の海のさる山も故山
ふ所はきて見ハ朝日のおまて有ハの月の西の山ふ行る我
あの月ふふふよせて立ふふ者ア山ふ山と山へるも其心ふ月ふ
いふハ日の月と映ふる故人へれふて日の山ふ映ふる心
とはアまの抑ふ朝日二分と山へる其あいふへのふ月のかなる
月ふ此景色ハ見る
花ふらつきて春ふ雨ふ死ちんふ
雨ふの月の清ふといへる俳歌ふよりての吟ふ冬の日の解ふ
生ふ春ふ暁ふ
かとき清ふその山者の尾い長〜
人麿の月哉の山者の尾ふ俳ふ河ふそりて山の尾引北
景色ハ山ふ山ふ山者ハ清ふとき清ふそり合ハせる所ふ

武蔵坊弁慶ふ
ふてこの者や忘てゆく空の衣川
俳諧ハ律儀ふの一名ふり其花信員の主てのけふ似ふれた
いふ所ふ武蔵坊ハ北花のてき俳諧ハ志て要ふ与ア
北衣川ふて死ふると古へ故懐ひ心ふり其地ふ住まりの
花ふ月ふ朱情ふの成伝ふ志てゆくハ時者の事
ふりといふ也ふ
はふ木〜ハ春の色ふる中ふくれふり
信ふ迷ふそふ山伏ふ春ふ春ふ迷ふ入へふる春ふ本ハ
ふて木〜といふ入てき草ふ似ふる本ふる故名つくると山へ
平の貞文のふふ所ふのたらや世ふ所ふ春ふてき此ふり
とて入へてあそぬ君の家とありをきほとりふりてみえて

木のみ小なりて人れたし人へぬの故小なりとハ人へてあをぬ君
のかしよ光るとハ又源氏物語小ものいらはきゆる
たきてしるよみさる所とそりて流るうちふしたりしとハ
いひかるへ　五月あるふ北向をき草ふ布施屋の森の
をく木ゆなせてをうれく咲せ所をき草の句なれて
夏まふ用ゐる事子細ふ

萱草の花の色

本草注曰萱草一名鹿蔥其花名宜男令人好歡事忘
憂衛風伯兮詩云焉得諼草樹之背傳云諼草令
人忘憂釋文諼本又作萱云云後草ハ忘れ草とも称て
憂なくさるへきものなるよしされと其花の色ハ赤こそて地方
見き花の色なり夏日の日ハ長き夏ひいこれ侍とハ忘れ
草なとの名ある曲節れ

壁喩品三界無安猶如火宅といへる心を

六月の汗ぬぐひ　菴　の　ふ　栽人

譬喩品法華經第二の巻ふ侍り譬喩の二字ハ共ふたとへと
よむ抽てのことへなりて説ふ施文れきハ名つくるとふを
其文ふ三界を安猶如火宅無衆苦充滿甚可怖畏とあり
三界とハ欲界色界無色界なり対いへは火宅と火ふやムる屋宅
なを三界ハ安のうちに火宅の内ふ出さるのかーされ仏の
中の衆生なを教んの為ふ抽くの方便なりの今六月北
見きん抽火宅ふ侍るのとしいるの苦界なのれてをてーき
在ふ行とへきや世の苦界なのれさるものかくのとーとの喩
なるへ　但菴ハ家き地なふ天守為のてくれるへ共ふ

堂宇を作り樹園を建るの故に番す本王宮殿にして花とも
称せり此句譬喩品火宅の説より出れる山魂こそ樹園
の一光顕の奪り見る者むべ所に小人へ俱会論
曰欲界に生見三夏故名欲界睡眠飲食欲婬欲也
色界天人有清妙色故名色界身相端厳等也無色界
天人無有形色唯有心故名無色界三界とハ是をいふ
なり

待恋

さぬ夜の唐衣こそ思ふ心ゆ一周南の詩に隙彼雀
此句ハ君を我思念せるの心ゆ一荷兮
嵬我馬虺隤と賦せ一其山に登りて思ふ所の人を
ふる意とも又衛の詩に彼垣に以望復関と有り一

類ひとも見る人の心に寄る所一但此句ハ托言にして唐衣の
さけるくーて人へ離れて高きにつきて見おろす男子の
来るを人と待恋のせいにかこつ賢妃淫婦なるきいやーき
其心ハ猶ほ同一思ひなるべきなり

冬の京　葬の子の　いな　のち　昌碧

只衛集に朝貞を嘆き心ばえて名を次西の孫に
拮師に雪の降りこる様　拙をつるうやのうちに降る雪ハさらに
庭毛の心地出て出れとすれ此句の意ハ西の孫のとく
雪の降りこるとして雪と芸花の咲るハ秋の時さ美一
この一朝貞の其子にてやはらんねさの雪のちりあきに
日数様まさぬ朝の庭のたの姿情を言ひ
殊さらきさらく作る

七部集通俗巻之二終